上の十地論義疏と慧遠の十地論義記があるが智儼の搜玄記も義記の缺所を補ふものとして用いうる。(2)義疏及び義記に十地經論の別本の引用を見出して現傳の菩薩流支等譯十地經論の外にその前翻譯本（恐らくは勒那摩提主譯本）の存在したることを論證す。

第三章　智儼教學に於ける唯識說

眞諦の系統を引く智儼が玄奘及び護法の唯識說に對して如何なる態度を取つたかを攻究。

第四章　新羅義湘の教學

第五章　明慧上人の華嚴思想

右二章は兩者について略傳著作、教判論、教理論、修道論に分つて組織的に記述する。

第三篇　華嚴教學に於ける二三の問題

第一章　經典解釋の方法論の研究（支那佛教史學、一・二、昭十二、十一）

第二章　佛教の本質論（宗教研究新十三、昭十一、十）

第三章　空觀展開の一斷面（佛教研究一ノ四、昭十二、十二）

（三一年三月刊・A5五九八頁・目錄索引二三頁・平樂寺書店發行・一五〇〇圓）

（日野）

◇　インド思想史

中村　元著

小冊子によくインド思想の全領域が大觀されている。リグ・ヴェーダからガンジー・タゴール・ゴーシュに至るまでを手落ちなく手際よく、これだけの分量に纏められた著者の該博な知識と透徹した理解にはただ敬服の外はない。多彩な敍述に少い頁數を適切に配分することについて、著者の深い配意が感ぜられる。

一讀してこの書の特色と思われる點を擧げると、

(1)　わが國の既刊のインド哲學史に取扱われていた範圍が、この書では餘程擴大されている。それは特に近代の部分において著しい。例えば、回教思想のインド南發展、サラスヴァティ・ラーマクリシュナなどの宗教改革運動、右に擧げたガンジー・タゴール・ゴーシュなど最近の思想家、インドの科學思想などについての論及がそれである。

(2)　思想展開の歷史をたどるについてその背景となつた社會狀勢に深い關心を拂つている。それは各章の標題に最も端的にあらわされている。例えば、第二章農村社會の確立とバラモン教、第三章都市の發展と自由なる思索の出現、第四章國家統一と諸宗教の變動、第五章統一國家崩壞後における諸宗教の變遷、等々。このようなインドの「社會的現實」に對する著者の强い關心は近年著者が諸雜誌に次々と發表された論考の上にも示されているところである。

(3)　參考文獻を詳細に擧げることは先行のインド哲學史の何れにも共通に見られるのであるが、この書では特に最近刊の內外諸文獻が多く擧げられてあつて、裨益されるところ多大である。

なお卷末に簡便な年表とかなり詳細な索引が附けられている。

最後に敢て蛇足の言を附加えるならば何といつてもこの書は、あまりに少い分量の中に多くの內容を盛つているため、時に、その敍述がいかにも素描的に過ぎている。著者が十分な餘暇を得て、この書のような構想の上に立つた本格的なイン

ド思想史の大著を學界に惠まれる日を切に待望したい。〔三十一年二月刊・岩波書店・全書版、14＋273＋42頁〕（櫻部）

◇　法然上人傳の研究　　田村　圓澄著

著者は既に、雜誌「佛教史學」（二の一～三）や「佛教文化研究」（一・二）に、その斬新な研究成果を發表して來た。當書はそうした既往成果をも集錄し、法然傳全體を鳥瞰しようとしている。

當書内容の第一部は〝法然傳研究の障碍〟より起筆し、諸傳記本の成立系譜や傳記作者の立場を克明に論述している。

第二部では、法然の誕生より入寂に至る間を編年し、その間における問題點を逐一、分析考證する。第三部においては、法然傳における諸問題の内、遁世と命名・傳記作者と天台教團・學匠・法然傳に現れた念佛者・遺誡文と起請文・三昧發得記・夢感聖相記・選擇集撰述とその付屬・源空聖人私日記と法然上人傳記（醍醐本）をとりあげ、それぞれ注意すべき所見を披瀝している。

周知の如く、その根本史料を缺く法然傳は、きわまる所、蓋然的たらざるを得ぬが、然し著者はその自覺の上にたつてよく諸傳記成立の系譜と事狀を明かし、傳記における潤色を是正する事によつて法然傳研究を歷史學の水準にまで高めしめた。客觀的な法然眞傳が、萬人の納得をもつてむかえられる日は、いよいよ遠いであろうが、然し法然傳における傳說生起の根源を、それぞれの時代と作者の立場において科學的に分析しつくした事は、法然研究史上、一時期を劃したものとして永く銘記されるであろう。〔法藏館刊二九五頁七〇〇圓〕（北西）

◇　淨土教美術　　石田一郎著

◇　密教美術論　　佐和隆研著

凡そ、佛教藝術はそれが佛教信仰あるいは佛教諸儀軌の藝術的表現を試みているのであるから、單なる樣式・形式論を中心とする、いわゆる美術史學の理論と方法は、宗教藝術研究の上にはそのまま適應されないといえよう。こうした意味において、本格的に佛教藝術の本質論の檢討を試みたものに石田・佐和兩氏の研究がある。

石田氏の『淨土教美術』は、『文化史學』『人文學』『文化學年報』に揭載された論文を集成補筆されたもので、論旨は主として、氏の提唱する文化史學的考察の上から、淨土教藝術の構成理論を追究している。卽ち、日本淨土教美術史の理解を「惠心教美術」「法然教美術」「親鸞教美術」に分類してそれぞれの藝術的表現の教理史的檢討を徹底的に檢討し、その系譜的關連を「來迎圖の展開」において纒めている。そして、同じく淨土教に屬する惠心教と親鸞教が「一は如來を眞如として靜的に捉えるに對し、二は彌陀を本願力として動的に抑えて」いる點を指摘し、その造型藝術展開をかかる教理的理解によると、法然教は惠心教と親鸞教の中間に在つて、廻轉の中樞として惠心教を飜轉し親鸞教に裏返へして個人化・内面化したという。氏の論旨は從來、作品第一主義の立場からこれらを一括して淨土教美術として理解した美術史研究に對し、内容の檢討から三類に分けて理解し、とくに難解な諸般の教義理